南山大学大学院
入学試験
出題の意図および解答例

人間文化研究科

キリスト教思想専攻（博士前期課程）

宗教思想専攻（博士後期課程）

2026年度・春季

NANZAN UNIVERSITY

目　　次

≪キリスト教思想専攻（博士前期課程）≫

基礎知識に関する筆記試験（神学領域）……1
（哲学領域）……2
（宗教学領域）……3
外国語に関する筆記試験　（英語）……4
（独語）……5
（仏語）……6
小論文　（神学領域）　〔社会人入学審査〕……8
（哲学領域）　〔社会人入学審査〕……9
（宗教学領域）　〔国内在住外国人入学審査〕……10

≪宗教思想専攻（博士後期課程）≫

専門領域に関する筆記試験（神学領域）……11
（哲学領域）……12
（宗教学領域）……13
外国語に関する筆記試験　（ヘブライ語）……14
（ギリシャ語）……15
（ラテン語）……16
（英語）……17
（独語）……18
（仏語）……19
（英語 2）……20

２０２６年度南山大学大学院 人間文化研究科 キリスト教思想専攻（２０２６年４月入学）
＜博士前期課程＞一般入学試験

（２０２６年２月２１日実施）　試験科目：基礎知識（神学）　配点：１００点

＜出題の意図＞

大問１は、本専攻神学領域での研究を目指す者にとって、その基本的な知識や理解について問うものである。受験生の研究テーマの多様性を勘案し、ある特殊な分野に偏らない一般的な神学的主題を五つ提示し、そのうち二つを自由に選んで記述するように求めることにより、比較的選択の幅を広く想定した。

大問２は、本専攻に入ってあるテーマについて研究を行うために必要な、最小限の準備状況について問うものである。それぞれの専攻においては、そのテーマについて今まで行われてきた先行研究に対するある程度の知識が必要であるからである。そうした先行研究の中には、当然ながらある神学者は神学思想が含まれている筈であるので、それについて簡潔に述べてもらう。

（ここでは、大門１に対する解答例と評価ポイントについて記す。）

＜解答例・評価のポイント＞

１．

① 第二バチカン公会議（１９６２～１９６５年）以降、活発に議論されているキリスト教と諸宗教の間の対話に対しる受験生の関心と知識を問う。受験生としては、「キリスト教以外の諸宗教に関する教会の態度についての宣言」（Nostra Aetate）を触れながら、或いは、そうした特定の教会文書については述べなくても、伝統的なキリスト教の救済理解が諸宗教との対話について持ちうる様々な可能性について述べることが求められる。

② ２０世紀の新約聖書学において大きな論点となった、ドイツのルドルフ・ブルトマンによる「聖書の非神話化」の思想について、その前提と内容について論じることが求められる。これは、単にブルトマンの神学的思想に対する賛成か批判かということが求められるのではなく、受験生にとって聖書理解とは何かについて述べてもらうために問題である。

③ 人類社会においては、いつも社会的弱者が存在し、経済的に貧しい人々の救いの問題は、教会がつねに関心をもっている課題であった。いくつかの神学的文書について触れながら答えてもいいし、それには触れなくても、受験生自身の見解を披露してもよい。

④ 神学と哲学の関係は、神学と神学以外の学問領域との関係と同様に、教会が福音を理解しまた述べるにあたって重要なテーマである。ギリシャ哲学との出会いによってキリスト教の諸教理（三位一体論、キリスト論など）が形成された以後、キリスト教はいつもその時代の哲学思想との出会いによって福音を理解してきたことについて簡潔にまとめることが期待される。

⑤ キリスト教が信じる造り主としての神理解は、現代社会が抱いている環境破壊問題についてどのように答えるべきか。すでに大きな問題としてクローズアップされている地球環境問題とキリスト教信仰の関係について、受験生が普段どのような見解をもっているかについて問う。

＜出題の意図＞

設問１．では、倫理学、倫理思想について、それがそもそも何を目的とするものであり、どういった問題を取り扱うものであるかという問いであり、これによって広く、また端的に、哲学という学問に向き合う受験者自身の根本的な姿勢をはかる。具体的な哲学者の倫理思想に言及してもよいとすることで、受験者の知悉する領域へと引き込んだかたちでの一定程度詳細な論述も見込まれる。さらに、これからの時代に求められる倫理および倫理学について自分の考えるところをとの問いより、いまの時代と社会にたいする受験者自身の意識、考察力、構想力をはかる。

設問２．では、専門領域にかかわるテクニカル・タームについて六つのうち三つを選択して論じさせることをとおし、受験者自身の哲学史および哲学的基礎知識の程度を確認する。選択肢として、古代・中世・近世・現代と西洋哲学史の諸時代をとおしまんべんなく提示することで、より視野での知識の確認が行われる。

設問３．では、今後研究したいテーマについて、およびその意義について、先行研究の状況、また受験者のこれまでの研究内容にもふれて論じさせることにより、現在の時点での受験者の専門領域への習熟度、および入学後の見通しをはかる。

＜解答例・評価のポイント＞

設問１．にたいしては、倫理学、倫理思想とは何より人間が尊厳ある個人としてよく生きることのために営まれる学問であるということ、そのことが正しくおさえられているかが問われる。ソクラテスによれば、人間にとってだいじなのは「ただ生きることではなくて、よく生きることである」とされる。ソクラテスの時代がそうであったように、いまの時代にはいまの時代なりの困難さ、ニヒリズム、相対主義がはびこるが、どのような時代でも守られるべき人間の自由、尊厳、喜びが、倫理学が倫理学であるかぎり論じられるべきである。

設問２．においては。たとえば「ソクラテスの対話法」の説明として、それが当時の大衆うけしたソフィストの修辞学、詭弁術に抗し、あくまで客観的な真理を求めて貫かれた真理探究法であり、絶えざる不知の知への立ち返りに基づくその手法こそは、いつの時代でも変わらぬ哲学探究の王道であることが答えられるべきである。「我思う、故に我在り（cogito ergo sum）」にかんしては、それが近世哲学の祖デカルトにより、近代初頭という新しい時代の始まりにおいて、いかなる既成権威にもよらず、真に自分自身で確信できる第一真理を求めたすえに、正しい論証をとおし据えられたテーゼであることが説明されるべきである。「カント（『純粋理性批判』）の第三アンチノミー（二律背反）」については、それが近代史上最大の哲学書とされるカントの『純粋理性批判』において示された決定論と自由をめぐる議論および問題であり、哲学上いかに解決が困難な根本問題であるかということが説明されるべきである。

設問３．においては、自分が取り組もうとしているテーマ、問題意識が、人間の問題として決して独りよがりなものでなく、人類の精神史上普遍的に継承されるものであり、また時代的、社会的にも共有される的確なものであることの説明が求められる。自身がこれまで学び、考察してきたことを踏まえ、また先行研究にもふれることで、その研究の意義を自分なりの文言で説明できるかどうかが問われる。

＜出題の意図＞

以下の通り、本専攻宗教学領域での研究の前提となる基本的な知識と理解について問う。

1．宗教学の主要テーマに関して、学部授業における概論的な知識を用いて、論理的な文章で表現できるかを問うている。

2．宗教学における様々な用語や概念に関する知識の正確さを幅広く問うている。

3．自身の研究テーマの意義を客観的に説明できるか、また入学後の研究遂行について十分な準備と見通しができているかを問うている。

＜解答例・評価のポイント＞

以下の通り、出題意図に記載のポイントを踏まえた解答が求められる。

1．宗教学の主要テーマに関して、具体例をあげつつ背景となる知識を用いて論じることが必要である。具体例としてどの宗教を取り上げてもよいが、世俗化論をめぐっては多くの先行研究があることから、それらを踏まえて論じることが望ましい。

2．事項説明は、宗教学の諸テーマに関する知識と理解の正確さを重視する。例えば a. 宗教の社会的役割については、カトリックにおける「社会教説」、仏教における「社会参加」、新宗教など様々な宗教における「社会貢献」などについて論じた先行研究がある。自説の展開だけではなく、こうした研究動向を踏まえて適確に論じることが望ましいのは、他の事項についても同様である。

3．自身の研究したいテーマに関する論述であり、関連する先行研究を踏まえてテーマ設定や方法論を具体的に論じることが望ましい。

＜出題の意図＞

本専攻での研究の前提となる英語の読解力を問う。今回は聖書解釈関連の研究書から、ヨハネ福音書のテキストをストア哲学の観点から解釈することを試みる箇所を出題した。神学領域、哲学領域、宗教学領域のいずれの受験生であっても、十分に読みこなせることを期待したいレベルの英文である。具体的な試験対策としては、自分の関心のある主題やキリスト教思想全般に関連のある分野の入門書を素材に、一定の分量の英文を一定の時間内に逐語訳する練習を入念に積み重ねてもらいたい。

＜解答例・評価のポイント＞

＜解答例＞

哲学は明晰さを追求するものである。本書で私が提示した第四福音書の解釈は、このテキストにおいて伝統的に見出されてきた「謎」、「神秘」、「霊的」な性質を称揚するのではなく、テキストの本質的な明晰さを明らかにすることを目指してきた。この本質的な明晰さを明らかにするために、様々な文脈については相対的に距離を置き、テキストそのものに焦点を当てて精緻な読解に取り組んだ。それは、それらの文脈が本質的にテキストそのものと無関係だからではなく（全くそうではなく）、テキストそのものと考えられる文脈化の範囲との間には隔たりがあまりに大きく、いずれにも頼ることができないからである。・・・。

この目的を達成するために私が用いた手法は、このために開発された「物語哲学的」アプローチである。これは第四福音書を「哲学的物語」として理解すべきという事実を反映している。おそらく、第四福音書が物語であることを否定する者はだれもいないであろう。しかし、この物語が二つの包括的な点において哲学的なものでもあることを我々は見てきた。第一に、ヨハネは福音書の主要な部分（ヨハネ１章を除いて、常に複数の章にまたがる）においては、まず物語自体を通して哲学的な問いを最初に提起し、そしてその終盤において物語の意味を通して答えるというような書き方で書いている。第二に、特定の種類の哲学、すなわち現代ストア哲学を発見的な読解レンズとして用いると、イエスと彼を信じる人たちに関する根本的、包括的な概念的ストーリーの明晰さが極めて顕著に浮かび上がることを私たちは見てきた。・・・。これらすべてのテーマは、ストア哲学において哲学的に展開されてきたプネウマに関する考え方に沿って理解される場合、とりわけプネウマが果たす役割に照らして理解される時に、納得のいくものになる。

＜評価のポイント＞

第一に、それほど長い文章ではないため、日本語の訳文は（途中に自信のない箇所を含んでいてかまわないので）時間内に最後まで作成してもらいたい。第二に、一般的な英語の語彙と文法の理解という観点から、構文の大きな取り違えと基本単語の不正確な訳は減点対象である。第三に、哲学や神学全般に関連する基本的な語彙（今回の英文では philosophical, conceptual, contextualization, Stoicism, narrative, mystery, spiritual, the Fourth Gospel など）については、特に正確な訳語が望まれる。

＜出題の意図＞

本設問は、受験者がドイツ語の基本的な語彙・文法を十分に理解しているかを確認するとともに、神学的文脈における専門用語や論述の言葉遣いにどの程度習熟しているかを測ることを目的とする。あわせて、本文中に見られる聖書的・神学的含意を読み取る力が備わっているかを確認する。辞書の使用は認めるが、単なる逐語訳にとどまらず、キリスト教神学に関する専門的著作を文脈的に理解する読解力を評価する。

＜解答例・評価のポイント＞

設問１の解答例：「本段落において筆者は、自然と文化の関係を適切に捉え直すことが倫理学、とりわけ社会倫理の根本課題であると主張している。人間の自然（または本性）は、失われた楽園という『善きもの』の記憶をなお宿しているものの、内的に破れを抱えており、それ自体では幸福を完成させることができない。そのため文化は、自然を破壊するものではなく、人間の尊厳ある生を可能にするために不可欠な補完的営みとして理解されるべきである。この観点から筆者は、『自然への回帰』によって幸福を回復できると考えたルソーの思想を批判し、同時に、人間の自然を全面的に悪とみなし国家権力による統制のみを重視したホッブズの立場にも反対する。キリスト教神学の視点からすれば、地上においては人間の精神や善への志向のうちに、しかも断片的な形で楽園は認められ、教育や善への働きかけを通して不完全ながら形成されうる。筆者の主張は、このように自然と文化の緊張関係を保持しつつ、人間の完成への可能性を肯定する点にある。」
設問１の評価のポイント：本文の内容を正確に把握したうえで、著者の主張が適切に言い換えられていること、ならびに神学用語が文脈に即して自然に用いられていることを重視する。単なる直訳や語句の羅列ではなく、論旨の構造が整理され、日本語として一貫した表現になっているかどうかを評価の基準とする。

設問２の解答例：「国家および経済における人間観について、キリスト教神学の立場から言えば、次のことが導かれる。すなわち、善へと向かう破れた自由をもつ個人には、つねに集合体に対する優位が認められるべきであり、人格は社会に先立つ根本的な優先性を有する。こうした理解に基づき、カトリック社会教説は、人格性と補完性（サブシディアリティ）という原理の中心的価値を強調し、結婚と家族を国家の細胞（基礎単位）として位置づけている。本来的な権利を最初に有するのは国家ではなく、各人格こそが譲渡不可能な基本的人権を有しており、国家が権利――暴力の独占を含めて――を行使しうるのは、人格の権利が脅かされている場合にそれを保護する限りにおいてのみである。したがって、哲学的あるいは経済的功利主義、また全体化傾向にある社会制度によって人格が公然に、あるいは隠微な形で従属させられるあらゆる試みに対しては、断固として反対し、これに抵抗しなければならない。・・・・・」
設問２の評価のポイント：ドイツ語の文法構造が正確に理解され、原文の意味内容が忠実に日本語に反映されていることを重視する。特に、Person、Persönlichkeit, Freiheit, Natur、Heil、Heiligung、Heilung、 Vollkommenheit、Vervollkommnung などのキリスト教神学に固有の用語が、文脈に即して適切に訳出され、用いられているかどうかを評価の対象とする。なお、「救済」と「救い」など、日本語における表現上の差異については、意味理解が正確であれば問題としない。

＜出題の意図＞

本設問は、受験者がフランス語の基本的な語彙および文法を適切に習得しているかを確認するとともに、神学的文脈における専門用語や表現にどの程度習熟しているかを測ることを目的とする。あわせて、本文中に含まれる聖書的言及や神学的含意を読み取る力が備わっているかを確認する。辞書の使用は認めるが、単なる逐語訳にとどまらず、キリスト教に関する専門的著作を文脈的に理解する読解力を評価する。

＜解答例・評価のポイント＞

設問１の解答例：「宇宙的復活という主題は、知恵文学およびパウロ書簡にその根をもっている。キリストは人類という種のみを救うために来られたのではなく、その救済は被造物全体に関わっている（コロサイ 1・16–19）。そして、神が創造されたのは、生物学的種としてのホモ・サピエンスだけでも、自然的要素だけでもなく、数、理念、機械といった『人工的』な諸現実をも含む、現実の全体である以上、この創造の行為は、神が創造されたすべてのものが、万物の神化を通して完全に成就されることを指し示している（一コリント 15・28）。モルトマンが的確に述べているように、「神は、万物の贖いを望まれないのであれば、万物の創造者ではありえない［34］」。したがって、『被造物』という性格を人類のあらゆる営為にまで拡張するならば、救済の問題は、それぞれに固有の仕方において、すべての生きとし生けるものに及ぶだけでなく、同様にそれぞれに固有の仕方において、いわゆる『無生物』の世界全体にも及ぶことになる。この無生物の世界には、知能のある機械が疑いなく含まれている。人間によって生み出された技術的諸現実に対する救済という理念は、二重の意味を含んでいる。」

設問１の評価のポイント：フランス語の文法構造が正確に理解され、原文の意味内容が忠実に日本語に反映されていることを重視する。特に、*salut*、*résurrection*、*rédemption*、*créature*、*Créateur* といったキリスト教神学に固有の用語が、文脈に即して適切に訳出されているかどうかを評価の対象とする。なお、「救済」と「救い」など、日本語における同義的表現の差異については、意味理解が正確であれば問題としない。

設問２の解答例：「この段落は、人間の技術的側面もまた、救済と浄化、そして神への高揚を必要としていることを主張している。終末の裁きにおいて、キリストは人間から技術的次元を切り離し、生物的側面のみを救うのではない。なぜなら、それでは人間全体の救済にならず、また人間が本質的に『工作人』であるという人間理解とも整合しないからである。現代において技術は人間存在の不可欠な一部となっており、そのことを踏まえるなら、キリストは人間の技術的次元をも包み込み、神化する存在として理解されるべきである。したがって、人間が神へと高められるためには、キリスト自身が『技術的キリスト』として、人間の技術的在り方を受け入れ、それを変容させる必要があると結論づけられる。・・・・・・・」

設問２の評価のポイント：逐語的な翻訳の正確さは必ずしも求めないが、本文の大意が的確に把握され、日本語として自然な形で表現されていることを重視する。とくに、人間が生み出した技術的実在を含む全被造物の救いを問うことの神学的意義について、以下の二点が明確に示されているかを評価する。

第一に、人間が本質的に技術的存在である以上、キリストの救済は生物的側面にとどまらず、その技術的次元をも浄化し、担い、神化するものでなければならないという点。

第二に、宇宙的救済の射程を人工知能（AI）を含む技術的実在にまで拡張することは、被造物すべてが神の前に固有の価値を有するという理解に基づけば神学的に整合的であり、それは人間に対する神の特別な愛を損なうものではなく、むしろその豊かさをいっそう明らかにするという点である。

２０２６年度南山大学大学院 人間文化研究科 キリスト教思想専攻（２０２６年４月入学）
＜博士前期課程＞社会人入学審査

（２０２６年２月２１日実施）　試験科目：小論文（神学）　配点：１００点

＜出題の意図＞

設問１　神秘を語る言葉という観点について、整合的な論述ができるかを見たい。

設問２　英語の読解力に加えて、神学の基本知識と文章の要約力を見たい。

＜解答例・評価のポイント＞

設問１　解答例は省略。着眼点と論述の適確さを重視して評価する。解答者自身の視点を含むことは歓迎されるが、「具体的な人物や特定のアプローチに言及して」という指示を無視した答案は大きく減点される。キリスト教神学と神秘の関係という大きな課題に対処するには、最初から包括的で抽象的な書き方をするよりも、何らかの適切な（できるだけ狭く限定した）論点を設定するのが有効だろう。各自が設定した具体的論点をめぐって、正確な知識を提示しながら説得的な議論を組み立てているかどうかを評価する。

設問２　【解答例】パウロによる義認概念の用例は、とくに『ロマ書』と『ガラテヤ書』に集中しており、とくに「律法の業」と「信仰」をめぐるキリスト教とユダヤ教の関係を明確化する役割をはたす。ただし、「パウロによる義認の概念」という表現は必ずしも適切ではない。なぜなら、この考え方が名詞として表現されるのはまれで、おもに動詞として表現されているからである。パウロの用語法は旧約聖書に根拠をもつ。旧約も名詞よりも動詞を好んでいるが、このことは義認が神のはたらきの結果であり、それによって人が神との正しい関係におかれることを示す。パウロはこれを継承し、「義とする」という動詞によって、罪深い人類と神のあいだに成り立つ状況を変容させる、神の普遍的なはたらきを提示する。――【評価のポイント】①英文の内容把握に大きな誤りがないか。②パウロにおける justification（義認、義化）の議論に関わる基本的語彙を正確に理解し翻訳できているか。③全体の逐語訳にとどまらず、論旨を明確に示す要約ができているか。

２０２６年度南山大学大学院 人間文化研究科 キリスト教思想専攻（２０２６年４月入学）
＜博士前期課程＞社会人入学審査

（２０２６年２月２１日実施）　試験科目：小論文（哲学）　配点：１００点

＜出題の意図＞

設問１　哲学と社会の関係について自分の考えを整合的、説得的に論述できるかを見たい。

設問２　英語の読解力に加えて、哲学史の基本知識と文章の要約力を見たい。

＜解答例・評価のポイント＞

設問１　解答例は省略。着眼点と論述の適確さを重視して評価する。現代の社会や企業で「哲学の社会実装」の取り組みが試みられているが、必ずしもそういう事例に言及しなくてもよい。何らかの特定の時代と社会を想定し、そこに見られる「哲学的な知と社会との関係」を具体的に論じつつ、自分自身の考えを開陳することが求められている。あるいは、特定の地域や時代に限定せず、一般論としてたとえば「役に立つ知」とはどういう意味かという観点から哲学と社会の関わりを考察するなどの答案もありえる。

設問２　【解答例】近代の心の哲学と中世の哲学的な魂論との根本的なちがいは「魂」と「心」の関係にある。デカルトと近世哲学では、anima（魂）と mens（心）は区別されず、どちらも同じく「思考するもの」をさす。そこでは、非物質的で延長をもたない心と、物質的で延長をもつ身体との関係が問題になる。これに対して、中世の思想家が考える「魂」は「心」よりもはるかに広い概念である。魂は単に思考するものではなく、栄養摂取から思考までを含む、生命に関わる活動の全領域を説明する原理である。さらに、魂は人間だけに固有のものではなく植物や動物も魂をもつ。したがって、中世の哲学的魂論の主要な問題は心と身体の関係ではなく、むしろ、生命の原理としての魂と思考の原理としての心（あるいは知性）の関係をいかに説明するかという点にある。――【評価のポイント】①英文の内容把握に大きな誤りがないか。②デカルト的な res cogitans としての心に対して、中世に論じられた魂がより広い生命原理であるという対比をわかりやすく述べているか。③全体の逐語訳にとどまらず、論旨を明確に示す要約ができているか。

２０２６年度南山大学大学院 人間文化研究科 キリスト教思想専攻（２０２６年４月入学）
＜博士前期課程＞国内在住外国人入学審査

（２０２６年２月２１日実施）　試験科目：小論文（宗教学）　配点：１００点

＜出題の意図＞

設問１　日本（人）と宗教について、整合的で説得的な論述ができるかを見たい。

設問２　英語の読解力に加えて、宗教学の基本知識と文章の要約力を見たい。

＜解答例・評価のポイント＞

設問１　解答例は省略。着眼点と論述の適確さを重視して評価する。「日本人は無宗教だ」という一般的言説を肯定するか否定するか自体はさほど重要ではなく、肯定や否定の論拠が評価のポイントである。自分自身の考察や分析だけでなく、日本（人）と宗教について論じた学者や論者について具体的な言及を含んでいることが望ましい。

設問２　【解答例】この世界を超越したいという願いとこの世界にしっかり根を張ろうとする思いとのあいだには創造的な緊張関係があり、これが世界宗教のダイナミクスを構成する。たとえばキリスト教もヒンドゥー教も、来世的な救済をめざす一方で神の世界内的活動を重んじるという構造をもつ点で似ている。この緊張関係をはっきりと知ることで、環境問題に対する宗教の可能性と限界をバランスよく理解することができる。だが、環境をめぐる従来の言説に欠けていたのは、この世界に持続可能な未来を実現するために、人々の態度や行動の変化をうながす世界観、象徴、儀式、倫理をどのように見いだすかという側面である。宗教が過去に奴隷制廃止や公民権運動に貢献してきたように、今日では社会正義と環境正義を結びつける新たな連携が生まれようとしている。――【評価のポイント】①英文の内容把握に大きな誤りがないか。②現世からの超越と現世への定着という二つの逆向きの宗教的志向が、環境問題に対する宗教の貢献を考える手がかりになるという中核的主張をとらえているか。③全体の逐語訳にとどまらず、論旨を明確に示す要約ができているか。

２０２６年度南山大学大学院 人間文化研究科 宗教思想専攻（２０２６年４月入学）
＜博士後期課程＞一般入学試験

（２０２６年２月２１日実施）　試験科目：専門領域（神学）　配点：１００点

＜出題の意図＞

大問１は、本専攻神学領域での研究を目指す者にとって、その基本的な知識や理解について問うものである。受験生の研究テーマの多様性を勘案し、ある特殊な分野に偏らない一般的な神学的主題を五つ提示し、そのうち二つを自由に選んで記述するように求めることにより、比較的選択の幅を広く想定した。

大問２は、本専攻に入ってあるテーマについて研究を行うために必要な、最小限の準備状況について問うものである。それぞれの専攻においては、そのテーマについて今まで行われてきた先行研究に対するある程度の知識が必要であるからである。そうした先行研究の中には、当然ながらある神学者は神学思想が含まれている筈であるので、それについて簡潔に述べてもらう。

（ここでは、大門１に対する解答例と評価ポイントについて記す。）

＜解答例・評価のポイント＞

１．

① 第二バチカン公会議（１９６２～１９６５年）以降、活発に議論されているキリスト教と諸宗教の間の対話に対しる受験生の関心と知識を問う。受験生としては、「キリスト教以外の諸宗教に関する教会の態度についての宣言」（Nostra Aetate）を触れながら、或いは、そうした特定の教会文書については述べなくても、伝統的なキリスト教の救済理解が諸宗教との対話について持ちうる様々な可能性について述べることが求められる。

② ２０世紀の新約聖書学において大きな論点となった、ドイツのルドルフ・ブルトマンによる「聖書の非神話化」の思想について、その前提と内容について論じることが求められる。これは、単にブルトマンの神学的思想に対する賛成か批判かということが求められるのではなく、受験生にとって聖書理解とは何かについて述べてもらうために問題である。

③ 人類社会においては、いつも社会的弱者が存在し、経済的に貧しい人々の救いの問題は、教会がつねに関心をもっている課題であった。いくつかの神学的文書について触れながら答えてもいいし、それには触れなくても、受験生自身の見解を披露してもよい。

④ 神学と哲学の関係は、神学と神学以外の学問領域との関係と同様に、教会が福音を理解しまた述べるにあたって重要なテーマである。ギリシャ哲学との出会いによってキリスト教の諸教理（三位一体論、キリスト論など）が形成された以後、キリスト教はいつもその時代の哲学思想との出会いによって福音を理解してきたことについて簡潔にまとめることが期待される。

⑤ キリスト教が信じる造り主としての神理解は、現代社会が抱いている環境破壊問題についてどのように答えるべきか。すでに大きな問題としてクローズアップされている地球環境問題とキリスト教信仰の関係について、受験生が普段どのような見解をもっているかについて問う。

＜出題の意図＞

設問１.は、倫理学、倫理思想について、それがそもそも何を目的とするものであり、どういった問題を取り扱うものであるかという問いであり、これによって広く、また端的に、受験者自身がみずからの専門領域に向き合う根本的な姿勢をはかることができる。具体的な哲学者の倫理思想に言及してもよいとすることで、一定程度詳細な論述を見込むこともできる。また、受験者の専門とする思想家や領域に引き込んでの論述も可能である。さらに、これからの時代に求められる倫理および倫理学について受験者自身が考えるところを述べよとの問いにおいて、現代社会にたいする受験者自身の意識、考察力、構想力をはかることができる。

設問２. では、専門領域にかかわるテクニカル・タームについて選択肢をとおして幾つか論じさせることをとおし、受験者自身の専門についての基礎知識を確認することができる。設問の選択肢として、古代・中世・近世・現代とまんべんなく提示することで、より広い知識の確認が行われる。

設問３.では、今後研究したいテーマについて、およびその意義について、先行研究の状況やこれまでの受験者の研究内容にもふれて論じでもらうことにより、受験者がテーマとする内容じたいの是非や見通し、受験者自身のテーマについての習熟度、および意欲などをはかることができる。

＜解答例・評価のポイント＞

設問１. にたいしては、倫理学、倫理思想とは何より人間が尊厳ある個人としてよく生きることのために営まれる学問であるということ、そのことが正しくおさえられているかが問われる。ソクラテスによれば、人間にとってだいじなのは「ただ生きることではなくて、よく生きることである」とされる。ソクラテスの時代がそうであったように、いまの時代にはいまの時代なりの困難さ、ニヒリズム、相対主義がはびこるが、どのような時代でも守られるべき人間の自由、尊厳、喜びが、倫理学が倫理学であるかぎり論じられるべきである。

設問２. においては。たとえば「ソクラテスの対話法」の説明として、それが当時の大衆うけしたソフィストの修辞学、詭弁術に抗し、あくまで客観的な真理を求めて貫かれた真理探究法であり、絶えざる不知の知への立ち返りに基づくその手法こそは、いつの時代でも変わらぬ哲学探究の王道であることが示されるべきである。「我思う、故に我在り（cogito ergo sum)」にかんしては、それがデカルトにより、近代初頭という新しい時代の始まりにおいて、いかなる既成権威にもよらず、真に自分自身で確信できる第一真理を求めたすえに据えられたテーゼであることが説明されるべきである。「カント（『純粋理性批判』）の第三アンチノミー（二律背反)」については、それが近代史上最大の哲学書とされるカントの『純粋理性批判』において示された、決定論と自由をめぐる問題であり、哲学上いかに解決が困難な根本問題であるかということが説明されるべきである。

設問３. においては、自分が取り組もうとしているテーマ、問題意識が、人間の問題として決して独りよがりなものでなく、人類の精神史上普遍的に継承されるものであり、また時代的、社会的にも共有される的確なものであることの説明が求められる。自身がこれまで学び、考察してきたことを踏まえ、また先行研究にもふれることで、その研究の意義を自分なりの文言で説明できるかどうかが問われる。

＜出題の意図＞

以下の通り、本専攻宗教学領域での研究の前提となる専門知識と理解について問う。

1．宗教学の主要テーマに関して、博士論文執筆に必要とされる高度な専門知識を用いて、論理的な文章で表現できるかを問うている。

2．宗教学における様々な用語や概念に関する専門知識の正確さを幅広く問うている。

3．自身の研究テーマの意義を客観的に説明できるか、また入学後の研究遂行について十分な準備と見通しができているかを問うている。

＜解答例・評価のポイント＞

以下の通り、出題意図に記載のポイントを踏まえた解答が求められる。

1．宗教学の主要なテーマに関して、先行研究を踏まえつつ論述を行うことが必要である。どの宗教を取り上げてもよいが、世俗化論をめぐっては多くの先行研究があることから、それらの学説を踏まえて論じることが望ましい。

2．事項説明は、宗教学の諸テーマに関する専門知識と理解の正確さを重視する。例えばa.「宗教」概念の形成については、宗教学がこれまで対象としてきた「宗教」や方法論の問い直しが批判的に行われており、またポスト宗教概念批判に関する研究も現れている。自説の展開だけではなく、こうした研究動向を踏まえて適確に論じることが望ましいのは、他の事項についても同様である。

3．自身の研究したいテーマに関する論述であり、関連する研究動向を踏まえてテーマ設定や方法論を具体的に論じることが望ましい。

＜出題の意図＞

本専攻博士後期課程での研究の前提となる古典語（ヘブライ語）の読解力を問う。問題１、問題２ともに、ヘブライ語聖書の中で平易な散文の箇所を出題した。ヘブライ語聖書を扱う神学領域志願者には全問正解を目指してほしいレベルの問題である。具体的な試験対策としては、アプリケーションに頼らず、辞書を用いてヘブライ語聖書の平易な散文を読解し、正確な日本語訳を作成する練習を積み重ねてもらいたい。

＜解答例・評価のポイント＞

問題１　解答例

וַיָּבֹא　בּוֹא（あるいはבוא）、動詞、カル（あるいはパアル）、wayyiqtol（あるいはヴァヴ継続未完了形、ヴァヴ未完了形）、３人称複数男性形。

הַמַּלְאָכִים　ה、冠詞、מַלְאָךְ、名詞、複数独立形。

以下略

問題２　評価のポイント

・分量は多くないため、日本語の訳文が最後まで作成されていること。
・語彙と文法の正確な理解に基づく原文に忠実な訳文であること。不正確な意訳は減点対象となる。

以上

＜出題の意図＞

ギリシャ語文法知識テスト。（第一問題）
Greek grammar test.

読解力とギリシャ語の文章を日本語に翻訳する能力をチェックする。（第二問題）
Checking reading comprehension skills and the ability to translate Greek text into Japanese.

＜解答例・評価のポイント＞

受験生は強調表示された各単語の文法を正しく認識しなければなりません。（第一問題）
The student must correctly recognize the grammar of each highlighted word.

受験生はテクストを正しく翻訳しなければなりません（1 ヨハ 2：12―17）。（第二問題）
Students must translate the text correctly (1 John 2:12-17).

＜出題の意図＞

A.　中世哲学研究などの分野で必要なラテン語の読解力を見たい。

B.　ラテン語の基礎的文法を習得しているかを確認したい。短文の空所補充によって、関係代名詞と所有形容詞についての理解をテストする問題である。

＜解答例・評価のポイント＞

A.　解答例は省略。『キケロー選集』11（岩波書店、2000 年）所収、山下太郎訳「神々の本性について」で日本語訳を読むことができる。宗教学の入門書などでも、英単語 religion の語源に言及する際にアウグスティヌスらのラテン教父の説とあわせて参照されることが多い箇所である。評価のポイントは第一に、ラテン語の構文と語彙に関して正確な逐語訳がなされているかどうかである。第二に内容に関して、religiosi（宗教的な人々）という語が relegere（読み直す）に由来するという語源説明をうまく理解できていることがカギである。

B.　解答　(1) quod　(2) nostrum

＜出題の意図＞

本専攻での研究の前提となる英語の読解力を問う。今回は聖書解釈関連の研究書から、ヨハネ福音書のテキストをストア哲学の観点から解釈することを試みる箇所を出題した。神学領域、哲学領域、宗教学領域のいずれの受験生であっても、十分に読みこなせることを期待したいレベルの英文である。具体的な試験対策としては、自分の関心のある主題やキリスト教思想全般に関連のある分野の入門書を素材に、一定の分量の英文を一定の時間内に逐語訳する練習を入念に積み重ねてもらいたい。

＜解答例・評価のポイント＞

＜解答例＞

哲学は明晰さを追求するものである。本書で私が提示した第四福音書の解釈は、このテキストにおいて伝統的に見出されてきた「謎」、「神秘」、「霊的」な性質を称揚するのではなく、テキストの本質的な明晰さを明らかにすることを目指してきた。この本質的な明晰さを明らかにするために、様々な文脈については相対的に距離を置き、テキストそのものに焦点を当てて精緻な読解に取り組んだ。それは、それらの文脈が本質的にテキストそのものと無関係だからではなく（全くそうではなく）、テキストそのものと考えられる文脈化の範囲との間には隔たりがあまりに大きく、いずれにも頼ることができないからである。・・・。

この目的を達成するために私が用いた手法は、このために開発された「物語哲学的」アプローチである。これは第四福音書を「哲学的物語」として理解すべきという事実を反映している。おそらく、第四福音書が物語であることを否定する者はだれもいないであろう。しかし、この物語が二つの包括的な点において哲学的なものでもあることを我々は見てきた。第一に、ヨハネは福音書の主要な部分（ヨハネ１章を除いて、常に複数の章にまたがる）においては、まず物語自体を通して哲学的な問いを最初に提起し、そしてその終盤において物語の意味を通して答えるというような書き方で書いている。第二に、特定の種類の哲学、すなわち現代ストア哲学を発見的な読解レンズとして用いると、イエスと彼を信じる人たちに関する根本的、包括的な概念的ストーリーの明晰さが極めて顕著に浮かび上がることを私たちは見てきた。・・・。これらすべてのテーマは、ストア哲学において哲学的に展開されてきたプネウマに関する考え方に沿って理解される場合、とりわけプネウマが果たす役割に照らして理解される時に、納得のいくものになる。

＜評価のポイント＞

第一に、それほど長い文章ではないため、日本語の訳文は（途中に自信のない箇所を含んでいてかまわないので）時間内に最後まで作成してもらいたい。第二に、一般的な英語の語彙と文法の理解という観点から、構文の大きな取り違えと基本単語の不正確な訳は減点対象である。第三に、哲学や神学全般に関連する基本的な語彙（今回の英文では philosophical, conceptual, contextualization, Stoicism, narrative, mystery, spiritual, the Fourth Gospel など）については、特に正確な訳語が望まれる。

＜出題の意図＞

本設問は、受験者がドイツ語の基本的な語彙および文法を十分に理解しているかを確認するとともに、神学的文脈における専門用語や論述上の言語運用にどの程度習熟しているかを測ることを目的とする。あわせて、本文中に見られる聖書的・神学的含意を的確に読み取る力が備わっているかを確認する。辞書の使用は認めるが、単なる逐語訳にとどまらず、キリスト教神学に関する専門的著作を文脈的・概念的に理解する読解力を評価する。

＜解答例・評価のポイント＞

設問１の解答例：「国家や経済が前提とする人間観について、キリスト教神学の立場から言えば、善へと向かおうとしながらも傷つきを負った自由をもつ個人は、常に集団よりも優先されるべきであり、人格は社会に先立つ根本的な地位を有する。このため、カトリック社会教説は人格性と補完性の中心的価値を強調し、結婚と家族を国家の基礎的単位と位置づけている。本来、権利を持つのは国家ではなく、一人ひとりの人格であり、国家が権利（暴力行使の独占を含む）を行使できるのは、人格の権利が脅かされている場合にそれを守る限りにおいてである。哲学的あるいは経済的な功利主義や、全体主義的な社会制度によって人格が公然と、あるいは密かに抑圧されることには、断固として反対し、抵抗しなければならない。しかし同時に、真の幸福像に照らして、人間の聖化と完成を国家と社会が積極的に促進すべきであることもまた真実である。そのためには、教育や模範を通して、癒やしと善へと向かう動機づけが必要である。・・・・・・」

設問１の評価のポイント：本文の内容を正確に把握したうえで、著者の主張が適切に言い換えられていること、ならびに神学用語が文脈に即して自然に用いられていることを評価の中心とする。単なる直訳や語句の羅列にとどまらず、論旨の構造が整理され、日本語として一貫した表現となっているかどうかを基準とする。

設問２の解答例：jedem 定冠詞 jeder の 与格・単数・中性「あらゆる～に対して」
offenkundigen 形容詞、与格・単数・中性・弱変化「明白な」
oder 接続詞「または」
auch 副詞「～もまた」
klandestinen 形容詞、与格・単数・中性・弱変化「密かな」
Unterjochen 名詞、中性・単数・与格（動詞 unterjochen の名詞化）「抑圧、隷属化」
der Person → Person 女性名詞・単数・属格「人格の」
など

設問２の評価のポイント：ドイツ語文の統語構造が正確に把握され、形態論的・統語論的観点からの文法分析が適切に行われているかどうかを評価する。

＜出題の意図＞

本設問は、受験者がフランス語の基本的な語彙および文法を適切に習得しているかを確認するとともに、神学的文脈における専門用語や表現にどの程度習熟しているかを測ることを目的とする。あわせて、本文中に含まれる聖書的言及や神学的含意を読み取る力が備わっているかを確認する。辞書の使用は認めるが、単なる逐語訳にとどまらず、キリスト教神学に関する専門的著作を文脈的に理解する読解力を評価する。

＜解答例・評価のポイント＞

設問１の解答例：「宇宙的復活という主題は、旧約の知恵文学やパウロ書簡に根ざしている。キリストの救いは人類だけを対象とするものではなく、被造物全体に及ぶものである。神は人類という生物種や自然界の諸要素だけでなく、数や観念、機械といった『人工的』な実在をも含む、あらゆる現実を創造したのだから、その創造行為は、万物が神において完成されるという普遍的完成（万物の神化）を指し示している。モルトマンが述べるように、もし神が万物の贖いを望まないのであれば、神は真に万物の創造主とは言えないだろう。したがって、『被造物』という概念を人間の営みの産物にまで拡張するなら、救済の射程は、生きとし生けるものすべてだけでなく、それぞれに固有の仕方において、機械知能を含む非生物的世界にも及ぶことになる。人間が生み出した技術的実在に救済を認めるという発想には、二重の意味が含まれている。」

設問１の評価のポイント：フランス語の文法構造が正確に把握され、原文の思想的内容が日本語として適切に理解・表現されていることを重視する。特に、*salut*、*résurrection*、*rédemption*、*créature*、*Créateur* などのキリスト教神学に固有の用語が、文脈を踏まえて適切に訳出・解釈されているかを評価の対象とする。なお、「救済」と「救い」など、日本語における同義的表現の差異については、意味理解が正確であれば問題としない。

設問２の解答例：条件文（仮定法過去）である。

Dieu 名詞・男性単数・主語「神」

ne ... pas 否定構文「～ではない」

serait 動詞 *être* の条件法現在（仮定法的用法）直説法ではなく、「反事実的仮定」を表す「～であろう／～であるはずだ」

le créateur 定冠詞＋名詞・男性単数・補語「創造主」

de toutes choses 前置詞 *de* ＋ 名詞句 *toutes*（形容詞・女性複数）*choses*（名詞・女性複数）「万物の／すべてのものの」

設問２の評価のポイント：フランス語文の統語構造が正確に把握され、形態論的・統語論的観点からの文法分析が適切に行われているかどうかを評価する。

＜出題の意図＞

中世哲学の入門書（Routledge Companions シリーズの一冊）を題材にした。中世の哲学者たちがアリストテレスの『魂について』における議論にもとづき、魂と身体の関係をあらためて考察するようになった経緯を説明した箇所である。古代哲学、中世哲学に不慣れな人には一見なじみにくいかもしれないが、内容はアリストテレスが魂について述べている基本的事項の紹介である。英文自体も平易な語彙と簡潔な文体で書かれているので、意味の通る日本語の翻訳を作ることはそれほど難しくないと思われる。本専攻では神学・哲学・宗教学の三領域を研究の柱としているので、自分が専門的に学ぶ領域以外についても入門書レベルの基礎知識はできるかぎり身につけておいてもらいたい。

＜評価のポイント＞

適切な訳語選択と文構造の正確な把握を重視して採点する。内容として重要な要点は、(1) アリストテレスは魂を身体の第一現実態や実体形相だと定義した。(2) したがって、魂と身体は切り離すことができない。(3) ところが、アリストテレス自身がこのような質料形相論にそぐわない説明をしている。ひとつは、知性は魂の部分であるという主張であり、もうひとつは、知性は思考するために身体器官を必要としないという主張である。(4) こうしてアリストテレスは中世の読者に考えるべき課題をもたらした。以上の論旨が成り立つためには、身体を生かす根源である soul と、その一部あるいは一側面である mind の区別が不可欠である。訳文でも soul（魂）と mind（心、精神、あるいは知性）を一貫して訳し分ける必要があり、この二語が同じようなものだと誤解してしまうと文章全体の流れをとらえそこなう結果になる。

発行：南山大学　入学センター
名古屋市昭和区山里町 18 番地
Phone ： (052)832-3119
E-mail ： nyushi-ka@nanzan-u.ac.jp
ＵＲＬ： https://www.nanzan-u.ac.jp/